

三国志の時代

今回学ぶこと

三国志の時代、中国の歴史は一つの転換期を迎える。三国志の時代に始まる長い分裂の時代、江南には新たな中国文化の中心地が生まれて貴族文化が栄え、華北では五胡と呼ばれる諸民族の国が建てられるようになる。新たな人と人とのつながりが生まれ、仏教や道教などの宗教が中国の社会に浸透して新しい中国文化が生まれる。分裂の時代が中国文化の多様化と発展の時代でもあったことを学んでいこう。

調べておこう・覚えておこう

- 卑弥呼のことを記した魏志倭人伝^{ぎしわじんでん}について調べてみよう。
- 仏教がこの時代にどのようにして中国に伝わり広まったのか、北伝と南伝のルートやそれを伝えた人々について調べてみよう。
- 4世紀にユーラシアの東側の中国と西側のヨーロッパで起こっていたことを比較してみよう。

三国志の時代

漢帝国が崩壊するまでの中国文化の中心地は、長安^{ちやうあん}や洛陽^{らくよう}など黄河^{こうが}流域^{りゅういき}であった。華北^{かほく}に覇権を築いた曹操は、長江^{ちやうかう}流域^{りゅういき}を手中に収めようと南下したが、208年に赤壁の戦いで劉備と孫権の連合軍に敗れ、ついに天下統一を果たせなかった。やがて魏^ぎ・蜀^{しよく}・呉^ごが自立すると、蜀の都の成都や呉の都（今の南京^{なんキン}）など、四川^{しせん}や長江の南にも新たな中国文化の中心地が生まれた。

漢帝国の崩壊によって儒教的な価値観がゆらぎ、才能重視の人材登用がおこなわれたり、老子や荘子の思想にもとづく人生観や芸術観、宗教を媒介とした人々の結びつきが生まれやすくなるようになった。また各地の勢力は異民族とも結んで勢力を広げようとしたので、漢民族*以外の諸民族が中国社会で活躍するきっかけとなった。さらに、三国はそれぞれ外交でも競い合ったので、中国と周辺世界との交流が促進された。魏は邪馬台国の卑弥呼の使者を歓迎し、倭国のことが中国の歴史書にも詳しく記されるようになった。

* : 「漢民族」という言葉は近代になってからのものであるが、この時代には殷周秦漢の歴史や文化を受けつぐ人々を「漢人」などというようになった。

遊牧国家の展開

魏は蜀を滅ぼすが西晋にとって代われ、西晋は呉を滅ぼして280年に中国を統一する。しかし30年ほどで内乱に入り、その後、華北では中国内地に移住していた五胡と呼ばれる諸民族が次々と自立して政権を立てる五胡十六国の時代に入った。君主の多くは中国の「皇帝」を称するいっぽうで、仏教を保護して仏典の翻訳などの事業をおこなった。

遊牧民族である鮮卑の国家北魏は華北を統一すると、初めは中国土着の宗教である道教を国教として仏教を弾圧したが、のちに仏教の復興に転じ、そのシンボルとして都（現在の山西省大同市）の近くに雲崗石窟を築いた。最初に作られた五体の大仏は、皇帝を如来として崇拝する「皇帝即如来」の思想により、歴代の皇帝の姿を模して作られたと言われている。北魏第6代の皇帝、孝文帝は自らの姓を中国風に改めるなど、大々的に漢文化を取り入れる漢化政策をおこない、古くからの中国の都であった洛陽に遷都した。洛陽の近くには竜門石窟が開かれ、中国化したスタイルの大仏が造られた。北魏とそれに続く王朝を北朝という。

南北朝時代

西晋が混乱に陥ると、多くの漢民族が長江を渡って江南に入り、今の南京を都として東晋王朝を起した。温暖湿潤な気候と豊かな自然に恵まれて王朝は栄え、都では貴族たちのサロンを中心に哲学・文学・芸術などの分野で貴族文化が栄えた。詩や書や絵画が、政治のための実用とは別に、芸術としての独自の発展を遂げるようになり、詩の陶淵明や書の王羲之、絵画の顧愷之などが現れた。

420年に東晋が滅亡してから、589年に隋が陳を滅ぼすまで、江南では今の南京を都とする宋・齊・梁・陳の四つの王朝が交代した。これらを南朝といい、呉と東晋を合わせて六朝という。こうした王朝交代にもかかわらず、貴族は高位高官を輩出し、高い社会的地位を保ちつづけた。梁の武帝の時代には繁栄の絶頂期を迎え、都には無数の仏教寺院が建ちならぶようになった。東南アジア諸国との交流が活発になり、東晋南朝の時代を通じて都は国際都市としても栄えた。高句麗や百済、新羅もまた海を越えて東晋南朝に使節を送り、日本からも「倭の五王」が宋王朝へ使節を派遣した。